

管内養豚場での発生を想定した豚熱防疫演習

紀南家畜保健衛生所
○松山真也 小松希
藤原美華

【背景・目的】

豚熱は、平成30年の岐阜県での発生以降、全国で断続的に発生しており、万が一の発生時には円滑な防疫対応が必要となる。和歌山県では一昨年、昨年と高病原性鳥インフルエンザ、豚熱の実践型防疫演習を実施し、振興局等関係機関との連携を強化してきたが、演習後のアンケート調査で改善すべき点も見えてきた。そこで今回、管内最大の養豚場での発生を想定し、これまでに得られた意見を反映させた実践型豚熱防疫演習を実施した。

【演習概要】

西牟婁地域にある養豚場において豚熱が発生したと想定し、当該農場の動員者集合検診場所の候補地の1つである町立小学校跡地で演習を実施した。新型コロナウイルス感染症対策として参集範囲を県内のみとし、出席者の検温や間隔をあけた椅子の配置、会場の換気、アクリル板の設置等、徹底した対策のもと開催した（図1）。動員者16名を含め、関係者70名が参加した。

演習は2部構成とし、第1部は①豚熱発生時の対応の流れ②豚熱発生時の防疫作業③豚の殺処分方法と想定農場の紹介（動画）④豚熱ワクチン接種に関しての4題について机上演習を実施した。③④は昨年度までの演習で得られた「実際の殺処分の方法がわからない」「農場内の構造がイメージできない」「豚熱ワクチンに関する説明がほしい」という意見をもとに、動画を活用するなど改良を加えて実施した。

第2部は実地演習とし、集合検診場所・消毒ポイント・現地防疫センターの運営演習および模擬豚を用いた殺処分演習を実施し、検診から作業終了までの一連の流れをロールプレイング形式で行った。さらに今年度は管轄振興局の意見を反映し、殺処分演習と同時進行する形で、現地対策本部の運営演習を実施した。この演習では現場と適切に情報を共有し、現場で発生しうるアクシデントに対応することを目的とした。

最後にアンケート調査を実施し、事後検討を行った。

【演習内容の詳細】

机上演習①②では、令和3年1月にかつらぎ町の養豚場で豚熱が発生した際のタイムスケジュールや防疫作業等について講義を実施した。机上演習③は、自衛隊提供の豚殺処分映像や、県の畜産試験場で撮影した豚の習性等の映像、当家保で撮影した当該農場の動画を使用した（図2）。机上演習④では、「なぜワクチン接種農場でも豚熱が発生す

るのか」を中心に講義を実施した。

実地演習では、振興局の地域振興班と健康福祉班が中心となり、集合検診場所での動員者の受付や検診、手荷物の管理、防護服の受け渡し等を行った（図3）。消毒ポイント運営では、建設班が中心となり車両の消毒・誘導、必要書類の記入等について作業を行った（図4）。現地防疫センター運営では農林水産振興班が中心となり、動員者の防護服着脱のサポートや、作業後の消毒について演習を実施した（図5）。殺処分演習は、豚の保定、誘導、運搬など実際の発生時に動員者に担ってもらう役割について、当家保より説明を加えながら実際の動きを確認した（図6）。そして現地対策本部の運営演習では、「防疫資材の不足」「重機の不足」「けが人の発生」の3つのシチュエーションを想定し、それぞれのアクシデントへの対応について確認した（図7）。防疫資材の不足については、発注先が異なる4種類の資材（防護服、炭酸ガス、投光器、台車）を例に、対応方法を検討した（図8）。

【アンケート結果】

アンケート（回収率61.4%）調査では、すべての机上演習・実地演習で「よく理解できた・理解できた」「非常に役立つ・ある程度役立つ」という意見を多数得られた（図9, 10）。特に動画を用いた机上演習については「分かりやすい」との意見が多く、継続して実施していくべきだと考える。今年度新たに実施した現地対策本部の運営演習でも、同意見が88.5%と十分な理解を得られた（図11）。しかし一方で、この演習は殺処分演習と並行して行ったため、動員者・観覧者からはどのような演習を行っているのかわからなかったとの意見もあった。今後は机上演習の際にあらかじめ詳細を説明しておくなど、演習の進行について見直しが必要であると考えられた。

【まとめ】

今回実施した防疫演習では、動画を盛り込むなど前年度より内容を更新したことで高い理解度・満足度を得られた。また新たに盛り込んだ現地対策本部運営演習でも、一部見直しが必要なものの、充実した内容であったと思われる。今後もアンケート調査等で得られた意見を参考に、よりよい演習を実施してまいりたい。